B 152　明治期衣服の研究―第十一報―　近江・小林家　（７）

昭和女大家政　村井不二子　○後藤好子
昭和女大短大　安藏裕子

目的　本報は、明治期における洋装導入の背景と、その特質について研究をすすめるため、基礎的データの収集としての実態調査から、昨年度（第十報）に引きつづいて、滋賀県愛知郡小林家所蔵の洋装資料について、その一部を報告するものである。

方法　ズボン６着、手袋９組をとりあげ、形態、素材、各部の計測による構成パターンの検討、縫製技術、付属品等の特質について考察する。

結果　ズボンは６着ともほぼ同型で単仕立てであるが、布地の質、織、色は各々異なり、上着との組み合わせによって、幾分着用目的に違いがあるものと考えられる。縫製上特に比翼及び腰部には、かなり高度な技術がみとめられた。手袋は皮製で、９組のうち１組を除いて同型であり、いずれも細部にわたって纖細な手縫いの縫合である。以上、７回にわたる調査報告を終了した。小林家伝来の洋装資料は、明治20年、４代目吟右衛門氏が渡欧米の際購入したものを中心に、背広やフロックコート等の他、ネクタイ、カラー、カフス、手袋にいたる付属服飾品まで数多く存在することがわかった。これらには、入手経路、着用年代等にいささか問題点のあるものも含まれるが、日本の近代化を背景に、彦根藩御用達商人であり、いわゆる近江商人として活躍した吟右衛門氏の洋装衣生活に対する心入れをうかがい知ることができ、また、実測データをもとに、洋装受容の一側面から史的位置づけについて考察することができた。